



Title	書評 『学術情報流通とオープンアクセス』
Author(s)	杉田, 茂樹
Citation	情報の科学と技術, 57(12), 586
Issue Date	2007-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/30206
Type	column (author version)
File Information	57-12.pdf



[Instructions for use](#)

書評

学術情報流通とオープンアクセス 倉田敬子著

(勁草書房, 平成19年8月)

杉田茂樹 (北海道大学附属図書館)

帯に「新しい学術コミュニケーションの形とは何か」とある。遠い過去、噴水広場に賢人が集い、対話を重ねることで学術コミュニケーションの総体が完結していた時代があった。直接問答を交わせる範囲を超えて世界が広がると、紙に著された知見が、書簡として、あるいは写本として世界を行き交うようになる。しかし、それでも間に合わないほどに学術的な交流圏は広がっていく。

需要は技術革新を引き起こす。生まれた新しい技術は、さまざまにその応用を試される。より多くの情報を、より広汎に、より効率的に伝達するために印刷技術は生まれ、やがて学術コミュニケーションにおけるキラー・アプリケーションとして学術雑誌が生まれた。西洋印刷技術の始点を15世紀半ばと考えると、*Philosophical Transactions* (1665-) の誕生によって新たな情報流通の形が定まるまで、ひと口に言ってこの間200年。

産業革命を経て20世紀に至り、世界の広がりや科学自体の拡大と深化は、学術情報流通の量的キャパシティとスピードのさらなる増大を要求した。印刷物の物流によってはこれを支えきれず、電子情報通信という新たな技術革新がもたらされた。

本書第I部「学術コミュニケーションとは」は、先行研究の入手と研究活動、それに基づく新たな知見の公表というサイクルについての詳細な分析の歴史を解説し、第II部「印刷物による学術コミュニケーション」では、学術雑誌と学術論文そのものの伝統的な在りようを確認する。そして、その上で、続く第III部「学術情報流通の変容」においては、まさに電子情報流通という技術革新の中で試みられているさまざまな情報メディア、すなわち電子ジャーナル、分野特化型文献アーカイブ、研究資金助成機関による文献アーカイブ、機関リポジトリなどの今日の状況がくまなく解説される。

インターネットを介した電子的情報流通を技術的基盤として、今後200年(あ

るいはもっと早く?) ののちに生まれるキラ・アプリケーションはどのようなものとなるだろうか。言い換えれば「新しい学術コミュニケーションの形とは何か」。

答えは本書では語られない。それは学術情報の流通を下支えしてきた学協会と学術出版、それから図書館、そして何よりもこのフィールドの主人公である研究者コミュニティ自身が開拓すべきフロンティアであるだろう。

印刷媒体による出版流通と電子的な情報流通はさまざまに特性が異なる。もっとも際立った特徴のひとつは、前者は紙とインクによって固定された直しの利かない媒体であり、一方後者は、その気になればいつでも変更することが可能である点である。

ピアレビューに基づいて研究論文の価値を定位し、唯一不変のバージョンとして固定する。読者は安心して、ある確立された情報内容を世界と共有できる。これがこれまでの研究成果公表の肝であった。

内容の改変される可能性をはらんだ電子ファイルに対し、印刷媒体の優位性としてしばしば語られるこの点は、しかし、こののち 200 年の間に乗り越えられるだろう。研究活動の進展、新たな知見の獲得に従って、随時アップデートされ、研究論文がライブに進化していく、そういう時代がくる。バージョン管理という論点は、その概念すら失われるかもしれない。

インターネット技術の最適な応用を探る試みはまだその緒についたばかりである。電子ジャーナルや機関リポジトリといったアイディアは、試行錯誤の中で一時代を築くかもしれないが、その姿は電子メディアの特性を本質的には表現していない。情報内容の変容可能性そのものを、あらゆる議論の前提として肯定し、社会的意味においても技術的意味においても、情報流通を再構築していくのはわれわれのこれからの仕事である。

本書は、それを考えるための基礎体力を培う上で、踏まえておくべき論点を網羅するレファレンスである。

(『情報の科学と技術』第57巻12号(平成19年12月) 所載)